

| | |
|---------|--|
| 氏名 | かみ お やす たか 神 尾 康 孝 |
| 学位の種類 | 博士（芸術） |
| 学位記番号 | 甲博制第38号 |
| 学位授与の日付 | 平成26年3月22日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当（課程博士） |
| 学位論文題目 | 写真における「影」の表現 |
| 作品テーマ | 「影」 |
| 論文題目 | 写真における「影」の表現 |
| 論文審査委員 | 主査 客員教授 有 野 永 霧 副査 教授 織 作 峰 子 副査 教授 山 縣 熙 副査 名誉教授 田 中 敏 雄 |

内容の要旨

この論文の目的は、影に関する理論的考察を行う点にあり、それによって申請者・神尾康孝は自身の写真作品「影」の制作過程を明確化し、かくてその作品の存在理由を明らかにしようとするものである。

外在するものとして確かな存在ではない感覚や感情を、写真でいかに表現するのかを問う。申請者は、対象と出会い、向き合うことで得られた撮影者自身の感覚や感情までも、対象の姿形とともに写しとることを写真の表現行為であるとする。あるものを写すだけでなく、あるとともにあらぬものとしての影を写すことでも、目には見えない感覚や感情を写し込んだ写真表現が可能になることを論考する。

まず、写真を歴史的に概観しながら、カメラのメカニズムから生ずる再現力を使う「写真の行為」と表現内容を問う「表現の行為」とを対比しながら、「写真の表現」を探究することから進めている。

第1章では、1-1「現象としての影」を考察することで影の意味を探ろうとする。

はじめに各種基礎的文献から影の意味と定義を探っていくことで、影のありようを把握しようとする。「かげ」と同音の「陰」「蔭」「翳」を区別することで影の現象が認識される。

るという難しい課題に取り組んでいる。本論はその幻影を、影という現象をキーワードにして解き明かし、作品化しようとしている。

論文担当の副査・山縣は、テーマである影を次のように考えている。

影という、その起源からして二重の意味をもつ日本語に着目して、その写真論を展開するとともに、彼自身の作品を制作した。分析的に進歩、発展し、分節された近・現代語では、影は「光と影」というように二項対立的に用いられるが、言葉は本来その起源においては二重の意味、時には相矛盾する二つの意味を同時に内包していたと思われる。影という言葉は文字通りそうした言葉の一つであり、現代語における「カゲ」の意味を持つと共に、「月影」に見られるように「ヒカリ」をも意味していた。申請者はその点に着目して、影の向こうに見えない「光」の「みること」あるいは「みえること」を論じるとともに、墳墓を撮影した自分の写真を通してそのことの可能性を示そうとした。もとより、それは光と影を別の「モノ」として把えることを日常とする現代人にとっても、また申請者にとっても、決して容易なことではない、と指摘している。

同じく論文担当の副査・田中は次の点に注目している。

影は様々な現象として現れることを科学的事柄として、又日本の古典や遊びで明らかにしている。又、影には多様な意味があることを心理学者、精神医学者、哲学者の人達の文言を借りて説明しようとした。そして、「見える影」と「見えない影」を「もの」と「こと」に当て嵌めて影について考察を試み、さらに、「見える影」と「見えない影」の間にある影即ち幻影という現象を想定し、それについて論じ、自身の作品「影」に結びつけて結論づけている。問題点も指摘している。申請者は論文において、影についてのさまざまな現象を理論的な方法で解き明かそうとしているが、多くの人たちの見解に左右され、論としての方向性が希薄になっている傾向が見られる。もう少し、具体性があればと思う。ただ、そのことは影という現象のもつ多様性と錯綜する影の内容の複雑さによるものであると推察している。

以下に、特に注目したポイントを具体的にいくつか上げる。

申請者は写真の本質である再現性と表現性を取り上げている。カメラの〈もの〉として姿形を再現する特性と、撮影者自信に生じた感覚や感情を〈こと〉として対比しながら、表現する意味性を論じている。この〈もの〉と〈こと〉の考え方は、申請者のテーマ「影」の理論体系の骨子をなすものであり、ユニークな観点である。

学術的な論を展開するにあたって、さまざまな資料を紐解き、カゲの意味を「影」だけでなく「陰」「蔭」「翳」にまで広げて考察する姿勢は、論文の基本的導入方法とは言え、論に厚みを持たせている。この後の的確な参考・引用文献も、論述の主要な役目を十分果たしている。

同じく、多様な例示も注目に値する。特に、独自の斬新さを感じるののは、影の意味認識を深

めるために、子供の遊びである影踏みや、分身としての鏡に映る姿を例示すると共に最終的に、面影という見えない姿や形象による心の中に思い浮かべるイメージと、表の影と裏の影にまで考えを展開している点である。さらに「月影」という言葉で光と幻影を浮かび上がらせ、「仏像」による視覚体験と宗教体験を語ることによって、自己のモノクロ写真の作品表現と密接に関係づけている点は、制作者の論として是とすることができる。

論文の審査結果として、時間に関する論述が欠けているという指摘もあったが、論文全体としては、多くの文献を渉猟して問題解決にあたらうとした努力と真摯な研究・制作態度は十分評価に値するものである。

作品について

作品の被写体は墳墓である。「影」をテーマにする上において適切な選択と言える。墳墓から感じられる死と生が混在した感覚や墳墓に潜む「何か」を感じさせる感情の表現を写真で作品化している。

作品は、写真の伝統の上に立ったオーソドックスな手法をとっている。大型カメラを使用し、銀塩フィルムと銀塩プリントをハイレベルの技術で仕上げている。額装展示も含めて、伝統に支えられた展示表現をとりながら、狙い通りの影の世界を感応させている。

墳墓の植生を凝視し、高度なプリント技術で表現された作品から、申請者が意図する作品「影」は見える影の再現にとどまらず、見えない影の観照へとわれわれを導く作品となっている。

制作担当の副査・織作の意見は次のとおりである。

写真が銀塩からデジタルにほぼ移行した今日において、申請者は一貫して銀塩作品を制作し、中でも難しいモノクロの限りなく黒域に近いトーンの階調で作品を仕上げ、墳墓という場所を被写体に、大型カメラによる細密表現撮影をしていることに副査・織作は注目し、一見肉眼では目を凝らさなければ見えてこない暗部を更にカメラのレンズという人間の目より劣る機器で表現する難しさの限界を、見事にアート作品に昇華させた、と評価している。今回の研究題目である「影」に関しては、墳墓に見える影を〈もの〉として見えたことから、作者が揺さぶられた感覚の表現を見えていない〈こと〉とし、それらの感覚との対峙を〈とき〉とし、更に深い掘り下げを試みている。この作品は、人間が肉眼で見える視覚のレベルを越え、肉眼では見えないがそこには存在している何かを、写真という表現手段によって解明しようと試み、研究を重ね、成果を得たことは評価に値すると考える。

副査・田中は作品を見て、墳墓全体は写されていないが、深い森を思わせる墳墓の森の写真を連続してみていると申請者の意図した森の影（見える影）のさらに奥のところに墳墓の幻影

（見える影と見えない影との間の影）が見えたように思えた、と語る。

申請者は、鑑賞者は「影」に写された墳墓の影を、〈もの〉の影として見る。その際、目に見える〈もの〉を通して、〈もの〉と共にある〈こと〉を感受する。こうして、写真は目に見えない感覚や感情までも表現することが可能になる、と述べているが、彼の作品はその論をまさに立証している。制作と論が互いに共鳴し合って作品へと昇華している点を評価したい。

結論

以上により審査委員全員は、申請者の論文・作品は、博士（芸術）の学位申請論文に値するものと認め、合格する。